

千子（せんこ） 妻（55歳）
万作 夫（55歳）
山田 近所の主婦
老婆

よく晴れた初夏の日曜日。高台の住宅地の中の千子と万作夫妻の家。小さな庭、リビングに続く小さなテラス。万作と千子が椅子に座っている。万作は新聞を広げ、千子は本を膝の上に置いて、庭の隅の家の軒下を見つめている。

千子 女王蜂はどこに居てるんやろか。
万作 （顔を上げる）……。

千子 巣の中に居てるんやろか。
万作 女王蜂がどうしたって……。

千子 （指さして）見て、あそこの軒下。
万作 あれ、蜂の巣。どないしたんやろ。

千子 嫌やわ。昨日は何にも無かったのに。
万作 昨日は気がつかんかったんやろ。

千子 あんなに大きな蜂の巣、絶対気がつくわよ。
万作 誰かが置いていったんかな？

千子 運んできたんと違う。
万作 ……蜂の引越し？

千子 そう蜂の引越し、みんなで夜の間に運んできたの。昼間に偵察隊の蜂が探しておいたのよ。あ、あそこの家は優しそうな奥さんがいるから、今度はあそこを僕たちの家にしようって。

近所の主婦・山田が登場。

山田 （二人に）おはようございます。

千子 （山田に気づいて）あ、おはようございます。

山田 （万作に）いい、お天気ですね。お二人で何のお話ですか。なんかいい雰囲気ですらやましい。

千子 そんなと違うんよ。お天気がいいから外で日光浴でもしようかなって。

山田 ご夫婦で日光浴なんて、本当に仲がよくていらっしやること。
万作 （立ち上がり）山田さんのご主人はお休みじゃないんですか。

山田 ゴルフなんですよ。うちは主人は主人、私は私、あんまり家の中で鼻突き合わせているより、そのほうが楽でしょう。

突然、「夕べの秘密」のメロディが鳴る。驚いて、顔を見合す三人。万作がすぐに自分の携帯の着メロに気が付いて、

万作 あ、携帯や。ちょっとスミマセン。

言いながら、家の中に入る。山田が万作の椅子に座りながら。

山田 ごめんね。朝早くに、お邪魔やった……？

千子 (おどけて) いいえエ、鼻突き合わせてる所やったからね、助かった。

山田 携帯の着メロ、変えはったんと違う。

千子 さあ、気付かんかったけど。

山田 最近、多いんやてね、あれ。

千子 あれって？

山田 (立ち上がって家の中を覗きながら) 旦那さん、男前やから心配でしょ。それにスマートで健康そのものやしね。

千子 あれって何？

山田 あ、奥さんそこ、ソファ変えたん。シンプルでいい感じやないの。

千子 そやから、あれって何やの。

山田 あれって……、ほら、男の人が着メロ変えたときは、奥さんに何か隠し事してるんやて。週刊誌で読んだんやけどね、まあ、奥さんそこは関係ないかもしれへんわね。

千子 ……。

山田 (また、家の中を伺い) まだ、電話してはるんと違う。

千子 「夕べの秘密」よ。

山田 あ、思い出した。前にあつたね、そんな歌。

(歌う) 夕べのことは もう 聞かないで

あなたにあげた 私の秘密。

小川 知子やったんと違う？

千子 山田さん、何か用事やないの。

山田 そうや、ごめんね。変な話ばかりして。実はね、これ。

山田が、持っていた袋から紙を取り出す。

山田 昨日、奥さん居てなかったんやけど、会長さんや、副会長さんに奥さんが作った、町内会の会報みてもろたんよ。

千子 すみません。昨日はちょっと用事が重なってしまて。会長さん何か言うてはった。

山田 うん、奥さんが作る会報は読みやすいつて、すごく好評。女の人やから、文章も優しいし、まあ、だいたい合格やなつて。

千子 だいたい……つて、何かあるの。

山田 そや、町内会の名簿見てて、気が付いたけど、ご主人の名前、「万作」さんつていうんやね。亀は万年。いい名前やわ。まるで、奥さんの名前に合わせてるみたい。

千子 古くさい名前でしょ。それで、だいたいつて、どういつこと。

山田 そうそう、ここ、この「カラスにご用心のところ」。

千子 ああ、これ、こないだ、新聞に書いてあつたんよ。最近このへんでもカラスが多なつて、ごみ袋が破られたりしててるでしょ。

山田 嫌やね、あれ。

千子 カラスは賢いからごみ袋の中身見て食べもん探すらしいんよ。そやから、どこのうちでも黒い袋にしましょう……つて、これ、あかんかつた。

山田 黒い袋はあかんのよ。

千子 え、何で。

山田 奥さん、知らんかつた。ゴミ袋は中身が見えるように透明の袋を使わんとあかんのよ。

千子 そんなこと……、いつから。

山田 前の役員さんの時に回覧出たでたでしょ。奥さんは病氣したはつたから無理もないけど、町内会の役員が知らんようではみんなが守らんのはしかたないなあつて。

千子 ……。

山田 そやから、ここ、何か他の記事にしといて。お願いね。

千子 ごめんね、直しとくわ。

と、山田が立ち上がりかける。すると山田に向き合つように老婆が登場する。

老婆 こんにちは。

山田 (驚いて) あ、お婆ちゃん、こんにちは。

老婆 (山田に) 奥さん、あなたのお名前は。

山田 山田です、あ、ほら、お婆あちゃんの家の向かいに住んでる。

老婆 そう、山田さん。お元気で。

言いながら、老婆が立ち去る。

山田が椅子に座つて、

山田 おばあちゃん、だいぶ進んできたわね。

千子 何が。

山田 ほらアルツハイマーっていうの、おばあちゃんの病気。ね、
今みたいに挨拶をしはるんよ。

千子 いいやないの。

山田 一日に何回もよ、会うたびに、あなたのお名前は……。

千子 私はあのお婆ちゃん大好きよ。仏さんみたいやない。

山田 おばあちゃん、あんな病気になるっても、家の中では一人ぼっ
ちで、ごはんの時も一人なんやて。

千子 なんて、息子さんと一緒に住んだはるんやろ。

山田 お嫁さんがきついんよ。

千子 それで家に居辛いから、いつも、表歩いたはるん。

山田 (家の中を覗き込んで) そう言うたら、奥さんとこのおばあ
ちゃんは・・・、しばらく姿が見えへんけど。

千子 ええ、ちよつとね、

山田 ちよつとて

千子 うん、ちよつと、病院。

山田 病院で、入院したはるの。

千子 でも、たいしたことないんよ。ちよつとお風呂で転んだだけ
やから。

山田 ええ、それやったらたいしたことやないの。町内会からちや
んとお見舞いも出さんとあかんし、おばあちゃん、脳卒中？

千子 (あわてて) 違う。違う。転んだ拍子に腰を打っただけやか
ら、まあ、歩けんことないんやけど、大事とって入院してる
の。そやからお見舞いなんて本間に結構やわ。

山田 そう、まあ、それやったらええけど、奥さんもお婆ちゃんも
動けんようになったら、ほんまに大変やもんね。

千子 私はもう大丈夫。山田さんと競走したって負けへんよ。

山田 ほんま、それやったらええけど。そしたら、それお願いね。

千子 え？

山田 町内会の会報。急げへんいうても、会長さんや、副会長さん
も気にしたはるし、明日までに行ける。

千子 うん、大丈夫、後で持って行くわ。

山田が立ち上がって、帰りかけるが、突然、蜂の巣に気付い
て立ち止まる。

山田 奥さん、あれ、蜂の巣と違うん。

千子 そう、さつき気がついたとこ、昨日まではなかったんよ。

山田 (突然厳しく) 保健所には電話した。

千子 保健所?、どうして。

山田 どうしてってきまつてるやないの、退治してもらうのよ。

千子 退治で、そんな。

山田 そうや、殺虫剤ある、ゴキブリのがいいわ。あれなら、蜂も

イチコロ。ゴキブリなみよ。

千子 そんな、かわいそうなこと。

山田 あの蜂の巣、まだ小さいわね。

主婦が庭の隅にある棒をもってきて右手に持ち、左手にビニール袋を広げて蜂の巣に近づきながら

山田 これで、巣ごと落としてしまふんよ。

千子 やめて、山田さん、そんなことやめてちょうだい。

山田 大丈夫よ、袋の口を塞いで出られないようにしてやるから。

千子 そんなことしたら、蜂が死んでしまふわ。

山田 そうよ、蜂は、殺してしまわんとあかんのよ。奥さんは何もわかってないわ。蜂の巣は町内会全体の問題よ。

山田が棒と袋をもって忍び足で蜂の巣に近寄っていく。突然一匹の蜂が大きな羽音で山田に襲いかかる。山田が悲鳴をあげて逃げ回る。

山田 きゃあ、蜂が襲ってきたー。助けて、奥さん、助けてー。

千子 (椅子から立ち上がった) 奥さん!、待ってよ、待ってちょうだい。

山田が逃げていってしまふ。蜂が千子を襲う。悲鳴をあがて椅子の傍らにおいていた杖をたよりに逃げようとする千子。が、思うように足が進まず、転びそうになってその場に蹲まってしまう。万作が飛び出してくる。

千子 (悲鳴で) 助けて、万作、助けて、

万作 千子、千子、大丈夫か

蹲る千子を蜂から守る万作。やがて蜂の羽音が遠ざかる。しばらくして万作が立ち上がり、

万作 大丈夫だよ、蜂はもう巣の中に帰ったよ。

千子が恐る恐る顔を上げ、杖をたよりに立ち上がる。

万作 それにあれば足長だよ、足長蜂はめつたに人は襲わないから心配することはないよ。

千子 (万作をみつめて) お父さん、私に隠し事してない。

万作 (驚いて) 何や、いきなり。

千子 お父さん、私に隠れて他の女の人と付き合っていない。

万作 付き合つて、そやな千子のほかには……、まあお袋やな。

千子 …… お母さん、老人ホームのパンフレット見てたわ。

万作 老人ホームのパンフレット?。

千子 お母さんの部屋の机の引き出しに入ってたわ。

万作 そら、別にどこかでもろただけやろ。

千子 お父さんは何にもわかってないのよ。私の気持ちなんか、何にもわかってない。お母さんの考えてることも何にもわかってない。

万作 お袋の考えてること?

千子 お母さんは、私と一緒にいるのが嫌なんよ。私がこんな身体やからお母さんは老人ホームに入りたいんよ。

万作 そんなことは考えてないよ。

千子 ウソ、私は何にも出来ないんよ。お母さんがお風呂で転んだ時も、お父さんがいなくなったら大変なことになっていた。

万作 ちゃんと、救急車呼んでくれたやないか。

千子 今だって蜂が襲つてきても逃げることも出来ないんよ。

万作 まだ、身体が元に戻ってないんやから仕方ないやろ。

千子 (涙声で) 元に戻ることなんか、絶対ないわ。

万作 今のままでええやないか。身体に障害があっても気持ち元気で健康ならそれでええんやないか。脳梗塞の後遺症なんやから、時間をかけてちよつとずつ直していったらええんやないか。

千子 (激しく) 万作にはわからへん。頭の病気がどんなにつらいか、自由に身体が動かないのがどんなにつらいか万作にはわからへん。私はまだ若いのに蜂から逃げることも出来ないんよ。お母さんだって老人ホームに入りたがってる。私はもう万作やお母さんのお荷物なんや!!。

先ほどの老婆が庭の向こうに立ち止まって二人を見ている。

老婆 こんにちは。

千子 (驚いて) あ、おばあちゃん。

老婆 今日はいいお天気ね。

千子 あ、はい、本当にいいお天気ですね。
老婆 あなたは何というお名前。

千子 わたし、千子です。鶴は千年の千子です。

老婆 そう、千子さん、いいお名前ね。きっとあなたは長生きしますよ。

千子 ありがとうございます。お婆ちゃん。

老婆が後ろを向いて立ち去ろうとする。

千子 (老婆に) お母さん。

万作 え、？

千子 お母さん、私、まだ思うように身体が動けへんけど一生懸命、生きていく。そやから、老人ホームに行きたいなんていわんと、何時までも私と一緒にいて。何時までも私と一緒に長生きして。

老婆 ありがとうございます。千子さん。

老婆が立ち去る。見送る千子と万作。

千子 ねえ、蜂は何時まで生きてるの。

万作 夏が終わるまでやろ。

千子 夏が終わったらみんな死んでしまうの。

万作 そう、みんな死んでしまう。

千子 それやったら、次の年の蜂は、女王蜂はどこから来るん。

万作 死ぬまえに女王蜂は最後の卵を産んで、誰にも知られない山の中の土の下に埋めておくんや。

千子 長い長い冬の間、蜂の卵は遠い山の中の暖かい土の中で生き延びる。そして、春になったら、次の年の女王蜂になるのね。

万作 そうやって、蜂たちは命をつないでいく。

千子 何年も何年も変わることなく、大切な命をつないでいくのよ。

暫く、蜂の巣を見つめる二人。

千子 蜂の巣、秋まで大切にしておきましょう。

(幕)